

## 第三講 唯除五逆誹謗正法

### 抑止門

私は長い間、本願文並びに本願成就文について述べて来た。しかし大体においてそれを尽くしたと思う。しかるに、本願文にも、本願成就文にも、同一にその結尾に、「唯五逆と誹謗正法とをば除く」と加えられている。これ即ちいわゆる「抑止門」と呼ばれるものである。この抑止門を軽卒に受け取る限り、五逆と名けられる悪人と誹謗正法といわれる罪人とは、救いから除かれることになる。これ古来、この抑止門が問題となれる所以であろう。我等は如何にこれを領解すべきであろうか。

### 五逆

五逆とは如何なる悪であるのか。

五逆については、「三乗通相の五逆」と、「大乘別途の五逆」とが説かれるが、三乗通相の五逆とは、又「小乗の五逆」ともいわれるもので、普通はこれが語られてある。この三乗通相の五逆とは、一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四には仏身より血を出し、五には和合僧を破る。以上の大悪を五逆と言われる。この五逆のことを、又五無間業といわれる。この五逆罪は、罪悪の極重極悪、理に逆い、人に反逆して、これ以上の劇悪なく、是れによつて、無間地獄の苦果を感じる悪業なるが故に、無間業といわれるのである。

「父を殺し、母を殺す」これまことに人倫に於いて許すべからざる大悪である。孝一は実に人倫の大本である。この人倫の大本を蹂躪して、父を殺し、母を殺す者は、人天共に許さざる大逆悪といふべきである。かくの如く、殺父、殺母を五逆の中に加えられた仏の教旨を思う時、仏は如何に孝の徳を尊重せられたかを知ることが出来る。「五逆の者は無間地獄の苦に入る！ 汝等衆生、この大罪を犯すこと勿れ。」と戒めたまう仏の御心には「一切衆生よ、父母に孝をつくせ。」との悲痛なる声が流れている。我等はまことにこの仏の教法の底に流れる聖意にふれなくてはならない。

父を殺し、母を殺す底の生活が如何に闇黒にして悪逆に満ちたものであるか。我等は、殺父殺母が地獄の最悪極苦たる無間地獄（一名、阿鼻地獄）の業なることを痛感する時、そこに光への生活の一步を踏み出すであろう。

しかるに、本師聖人は「親をそしるものをば五逆の者と申すなり。同座せざれと候うなり。」とその弟子に対して仰せられた。これによれば、親を殺すとは、手によつて親を殺すことだけではなく、心に親を悪み、口に罵ることも亦、五逆である。されば、親不孝者の全ては五逆である。凡そ、親との間に溝を持ち、親を悪み、親を罵る者が五逆であるならば、世に五逆罪を犯さずと言ひ得る者が幾人あるであろうか。此に問題は我等にとつてまことに切実な問題となつて来る。

第三は、阿羅漢を殺す。阿羅漢とは、小乗の悟を開いた聖者のことである。即ち悟を開いた聖者を倒すことである。聖者は世の光である。道そのものである。かかる世の光、道の行者を殺す者は、人生をして暗黒そのものとならしむるものであり、その人自体、道をも光をも持たぬ悪逆そのものである。

第四は、仏身より血を流す者、これ仏を敵とし、仏に対して悪意を持てる者の悪逆である。提婆の如き者である。仏は道そのものであり光であり、教法の主であり、世尊である。これに危害を加えんとするの悪たることは言う迄もないことである。

第五は、和合僧を破ること。これ数多の僧衆、和合して仏事を行じ、仏道を修するを、手段を以て、之を離間し、鬪乱せしめて仏法の事を廃せしむることである。和合僧即ち僧伽（三人以上の僧、和合して仏法を修する団体）こそは、仏法の具体化されたものである。仏、法と共に三宝の一に拳げられるものであつて、如何に、仏法ありとも、これを大地に成就するものなくば、教法が事実とはならない。されば僧宝によつてのみ仏・法・僧も、二宝たることを得るのである。これ仏陀が、特に、仏法僧の三宝に帰依すべきことを命じたまいし所以である。されば五逆中に於いても、この破和合僧を以て最も重罪とせられた所以である。

以上の五逆中、殺父、殺母の初二は「恩養に背く」ものであり、後の三、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧は「福田を壊す」ものである。世にこの恩田に背き、福田に違するほどの悪業はあり得ないが故に「逆」と言われるのである。

まことに一切衆生の実相は、この逆の一字につきるものである。

しかるに、かかる五逆罪の根本をなすものは実に「誹謗正法」である。正法とは仏法である。正法を誹謗するものの極重罪たることを、曇鸞大師、往生論註上に説いていわく、

「經に言わく、五逆の罪人、阿鼻大地獄の中に墮ちて具さに一切の重罪をうく。正法を誹謗する人は、阿鼻大地獄の中に墮ちて、この劫もし尽きぬれば、また転じて他方の阿鼻大地獄の中に至る。是の如く展転して百千の阿鼻大地獄を経と。仏出ずることをうる時節を記したまわず。誹謗正法の罪極めて重きを以ての故なり。また正法とは即ち是れ仏法なり」と。

五逆罪が無間地獄に一劫の重罪を受くるに對して、誹謗正法は、遂に無間地獄を出ずる期なきことが示される。まことに誹謗正法は、遂にそれがそのままである限り、永遠に助からざる極重罪たることを知るべきである。かく永く成仏せざるものなるが故に、謗法闡提と言われる。闡提とは不成仏の義である。

### 曇鸞の説

以上の如く、五逆謗法は最重罪ではある。しかし、もし如来にして大慈悲ならば、一切衆生は如何なる悪人と雖も救われねばならない。如来は決して、五逆謗法の極重悪人を除いて、他の比較的善人のみを救いたまはずはない。しかれば何故に大經には「唯、五逆と誹謗正法をば除く」と言われるのであるか。この問題を受け取り、領解して下さった方が、三人ある。曇鸞大師と、善導大師と、我が聖人とがそれである。我等は、まず曇鸞大師に聞かなければならない。鸞師は、往生論註の上の終りに於いてまずこの問題を提出された。

「問うて曰く、無量壽經に云く、往生を願ぜむ者、皆往生を得しむ、唯五逆と誹謗正法とを除くと。觀無量壽經に五逆十惡諸の不善を具せるもの亦往生を得と言えり。この二經いかに會せむや」

これ即ち大経と觀經との相違を挙げて、この問題に答えんとせられるのである。大経には、五逆と誹謗正法とを除くと云い、觀經には、五逆十惡諸の不善を具するものも往生を得しむと云われる。この問題について鸞師は、

「答えて曰く、一經には二種の重罪を具せるを以てなり。一には五逆、二には誹謗正法なり。この二種の罪を以ての故に所以に往生を得ず。一經には但十惡五惡等の罪を作ると言ふて正法を誹謗すと言わず。正法を謗せざるを以ての故に是の故に生を得しむ」と。

以上の説は、鸞師独特の解釈であり会通であつて、いわゆる「単複説」と称せられるものである。觀經の中に於いて、

「下品下生とは、或は衆生有りて不善業を作り、五逆十惡諸の不善を具せん。この如きの愚人、惡業を以ての故に應に惡道に墮し、多劫を経歴して受苦無窮なるべし。この如きの愚人、命終の時に臨み、善知識の種々安慰して為に妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん……是の如く至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀仏と称せん。仏名を称するが故に念々の中に於いて八十億劫の生死の罪を除き、命終の時、金蓮華の猶し日輪の如くにして其の人の前に住するを見ん。一念の頃の如くに即ち極樂世界に往生することを得。」

と説かれたるをさして「一經はただ十惡五逆等の罪を作ると言うて、正法を誹謗すと言わず、正法を謗せざるをもつての故に、是の故に生を得しむ。」と言われたのである。まさしくこの經文には五逆罪を挙げて誹謗正法を言はない。五逆罪のみなるが故に念仏によつて助けられるのである。しかるに、大経に於いては五逆と謗法と重なるが故に助からないと言われるのである。觀經は単であり、大経は複である。しかしこの単複説は、唯、二罪一罪によると云うのみのことであろうか。鸞師の真意は唯それにとどまるのであろうか。

### 必不得生

罪の一種二種で解決するのであるならば、ここに一つの問題がある。鸞師はそれを挙げられる。

「問うて曰く、たとひ一人は五逆罪を具して正法を誹謗せざれば經に得生を許す。復一人ありて但正法を誹謗して五逆諸の罪無きもの、往生を願ぜば生を得るやいなや。」

これ正しく投ぜられねばならぬ問題である。五逆罪を造らず、ただ正法を誹謗するだけの者も、往生を願ずれば助かるやと言うのである。

「答へて曰く、但、正法を誹謗せしめて更に余罪なしと雖も、必ず生を得じ。」と、答は極めて明確である。それは五逆と謗法の罪の輕重の問題なるが放である。

「何を以て之を言わば、經に言く、五逆の罪人、阿鼻大地獄の中に墮して具さに一劫の重罪を受く。誹謗正法の人は阿鼻大地獄の中に墮して、この劫尽きれば復轉じて他方の阿鼻大地獄の中に至る。是の如く展轉して百千の阿鼻大地獄を経。仏出ずるところを得る時節を記したまはず。誹謗正法の罪、極重なるを以ての故なり。また正法は即ち是れ仏法なり。」

と、以上は、五逆よりも謗法の重きを仏説を通して知らしめられたのである。さればかかる極重罪の人は、他の一切の悪なしとするも、遂に浄土に往生することは出来ないと言われる。しかれば何故に生ずることを得ないのであろうか。それに対して鸞師は、

「この愚痴の人すでに誹謗を生ず、安んぞ仏土に願生するの理あらんや。たとい唯彼の安樂に生ずることを貪して生を願ぜむ者は、また水に非るの氷、烟なきの火を求めんが如し。豈に得る理あらんや」と。

愚痴の人は、仏法を誹謗する。仏法を誹謗しつつ、しかも仏土に願生するという道理はない。仏法そのものが浄土に願生するの道は正信念仏にあることを説きたまうに、それを誹謗して、しかも仏土に願生するという理はあり得ない。もし万一彼の安樂に生ずることを貪る所の貪欲から生れることを願うならば、水でない氷を求め、煙なき火を求めるにも等しい。これ全くあり得べからざることである。この故に誹謗正法の罪人は、必ず生ずることを得ないと説かれたのである。鸞師の答はまことに柄として一点の疑難さえとどめない。誹謗正法のままで何で浄土に往生しよう、古往今来、それを得んとする意志さへなくて得たる例はあり得ない。

#### 誹謗正法の相

曇鸞大師の説によれば、五逆罪を造るものは救われるが、誹謗正法の者は浄土に往生することの出来ざる者であった。「正法を誹謗する人は阿鼻大地獄の中に墮ちて、この劫もし尽きぬれば、復転じて他方の阿鼻大地獄の中に至る。是の如く展転して百千の阿鼻大地獄を経といえり。仏出ずることをうる時節を記したまはず。誹謗正法の罪極めて重きを以ての故なり」と説かれる。

まことに、経には、五逆と誹謗正法とを以て無間地獄の業とせられる。即ちこの罪悪こそは、最重の悪業である。しかるに五逆罪は往生することが出来るに對して、誹謗正法は、たとえ他罪なくとも往生することは許されないと説かれる。それは何故であるのか。我等は更に鸞師に聞かなくてはならない。鸞師はそこで次に謗法の相を問題とせられる。

「問うていはく、何等の相かこれ誹謗正法なるや。答えて曰く、もし無仏、無仏法、無菩薩、無菩薩法と言わん。是の如き等の見をもつてもしは心に自ら解り、もしは他に從いてその心を受けて決定するを、皆誹謗正法と名づく」と。

以上の問答によつて明らかなるが如く、誹謗正法の心は、仏と法と僧との三宝に對して「無し」との見解を持つことである。仏と法と菩薩（僧）と菩薩法とを挙げられる所以は、菩薩は法を説くものである。仏の法を信じて、仏の法を説くものである。その菩薩の法を誹謗する者も亦、仏の法を誹謗するものなるが故である。世には、僧の法はこれを信ずるに似て、如何なる菩薩の法をも信ぜぬ者がある。果して仏の法を信じているであらうか。

誹謗正法のもの、仏と法と僧とに對して「無し」と言うものである。しかしして是の如き見は、自ら心に解るも、他の言うに從いて決定するも同一である。他の言うを聞いてかくの如く信ずるも、その心の底には恐るべきものを持つてこそ、他の言に從

うのである。それ故に「その心を受けて決定するを、皆誹謗正法と名く」と言われるのである。

### 其罪最重

しかしかくの如く説かれるについて一つの問題がある。

「問うて曰く、是の如き等の計は但これ己れが事なり。衆生において、何の苦惱有れば五逆の重罪に踰えむや。」

と衆生の不審とするところを問題とせられる。三宝を無しと計らうが如きは、ただ、その人個人の事ではないか。その人個人の心内の問題であつて、他の衆生に關係はないようである。他の衆生に如何なる苦惱を与えることによつて、五逆罪よりも誹法を重罪と云われるのであるか。まことに、父を殺し、母を殺し、聖者を殺し、仏身に危害を加え、和合僧を破ると言う五逆罪こそ最も恐るべき重罪ではないか。しかるに、造られたる五逆罪は助けられて、個人の心内の事実たる誹法の罪は助けられないと言われるのは何故であるか。鸞師のそれに対する答は明瞭である。いわく、

「答えて曰く、もし諸仏菩薩、世間、出世間の善道を説きて、衆生を教化する者ましまさずば、豈、仁義礼智信あることを知らむや。是の如き世間の一切善法皆斷じ、出世間の一切賢聖みな滅しなむ。汝ただ五逆罪の重為ることを知りて、しかも五逆罪の正法無きより生ずることを知らず。是故に誹謗正法の人は其罪最重なり。」

我等は襟を正して鸞師の教えの前に立たなければならぬ。正法を誹謗するといふことは、前に出されたが如く、仏もなし、仏法もなし、菩薩もなし、菩薩の法もなしと、全て仏法僧を認めないことであつた。これ即ち、世に如何なる尊いものを認めず、法を認めず、道を認めず、更に道の人、法の人を認めないことである。唯に認めないのみならず、それを滅ぼさんとする心である。親を殺し、聖者を、仏身に危害を及ぼし、和合僧を破るが如き五逆罪は、これ全て惡逆の心が発動して事実となつたのではないか。五逆罪はまことに恐るべきである。世に最もおそるべき行為である。しかもかかる逆惡の根底は実に誹謗正法の魂ではないか。

### 一切賢聖皆滅

「もし諸仏菩薩、世間、出世間の善道をときて、衆生を教化する者ましまさずば、豈、仁義礼智信あることを知らむや。」

諸仏菩薩は、世間道、出世間道を説いて衆生を教化して善道に入らしめたまう、世の燈明台である。人の世の光であり、華である。この尊き人ましまさずば、大般涅槃の悟、出世間道はもろんのこと、世間道たる五常五倫の道さえも知らぬであらう。

(一)君臣義あり、(二)父子親あり、(三)夫婦別あり、(四)長幼序あり、(五)朋友信あり。(以上を又五倫という)

以上の外に、仁、義、礼、智、信を五常という。仁とは道義の枢機であり、人生の達道であつて、一切の万善の綜体、一心の徳である。「なさけ、いつくしみ、おもしろい」と等と訓じられるが、仏教の慈悲にもあたる心で、一切の道を可能ならしむる道義の枢機である。義とは、それによつて行為の宜しきに叶うこと、正しき道を守りて一

身の私利私欲、利害得失を顧みぬことである。礼とは、心に敬い行儀に則を守つて人の踏むべき道を守ること、智とは智慧、信とはまこと、その言に嘘いつわりなきこと、これまことの人なるが故に、人と言とを書きてまことというのである。

以上、仁義礼智信の五常をふみ、これを説いて教うるものも亦、菩薩賢聖である。されば「もし諸仏菩薩、世間、出世間の善道を説きて衆生を教化する者ましまさずば、豈、仁義礼智信あることを知らん」と言われるのである。

しかるに誹謗正法の心は、かかる一切の仏菩薩を認めぬ心である。美しき正法の園に入つて、自力我慢の鎌を研ぎすまして、一切の花の首を切り落さんとする心であり、三世十方の諸仏菩薩を一人残らず滅さんとする心である。己より尊きものの全ての存在を許さぬ心である。大邪見、大我慢、大我執、大嫉妬、己の身、己の思想、己の幸福、己の生のみを主張してそれを通そうとする我の心である。

提婆達多、この心より生れ、弁円もこの心によつて聖人を斃さんとし、吉崎の御坊の古話、嫁おどしの般若の面をかぶり、竹藪に鎌をふり上げて嫁の求道の道に脅迫した老婆、み法の席に野次る青年、等々、世にまことに最も恐るべきものがありとすれば、この謗法の心である。

されば、鸞師次で、「かくの如き世間一切の善法みな断じ、出世間の一切の賢聖みな滅しなむ。」と仰せられた。まことに、世間、出世間のいづれを問わず、一切の賢聖の全てを亡ばさずんばやまぬ心、もしこの心にも言わせんか、世に文化の美しき殿堂、靈性の美しき華園は大地にあとを絶つであろう。

「汝ただ五逆罪の重たることを知りて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることを6 知らず、この故に謗正法の人は其罪最重なり」と。

我等はこの鸞師の説の前に、はじめて、五逆罪よりも謗法の罪の重き所以を知らしめられた。仏法を信ぜぬ事は、ただこれ己の事である。それが衆生において何の苦悩であるか、との問いこそ、まことに「但、五逆罪の重きことを知りて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることを知らず。」五逆罪の根底が誹謗正法にあることを知らざることよりおこる疑問である。誹謗正法の極重罪たることを知るべきである。

### 衆生の真相

五逆罪は最重極悪の罪業である。しかもそれは已に造れる悪業である。しかるに已に造れる罪悪の根底には、潜在的なる誹謗正法の最重罪がその心内深く横たわつていたのであつた。しかれば、誹謗正法の罪を持てるものにして、その程度の差こそあれ、五逆罪を造らずして終わるものがあるであろうか。既に述べられたが如く、誹謗正法とは、「仏も無し、仏の法もなし、菩薩もなし、菩薩の法もなし」との決定を持つるものであつた。しかしてかかる三宝を無しと断定せる者は、一切衆生の全てではないか。最初より三宝の成立を信じ、三宝を仰信する者はあり得ないが故に、一切衆生は一切三宝に対して反逆せるものである。まことに「逆」の一字こそは、衆生の衆生たる真相である。

人間は名利の子であり、幸福を希うものであり、しかも罪悪に対しては、社会的制裁あり、法律の裁きがあるが故に、父を殺し、母を殺し、聖者に刃するものは少ない。

しかしそれを為し得ないが故に無いのではない。ありつつも造り得ないのである。もし法律なく制裁なくば、人生は慘憺たるものであろう。ここに於いて、たとえ身にかけて造らずといえども、五逆謗法の心なしと言うことは出来ない。彷彿として寄せてはかえす生死大海の悪雑なる大波小波、大地の上は永遠に無限に罪惡それ自体である。しかも、かかる罪惡の波の根底はつきとめられた。しかるに、かかる謗法の罪根、根本本罪は衆生の胸中に満てるものである。

鸞師は今、卒爾としてこの謗法の徒の往生を明かしたまわず、以上引用した文に続いて、五逆十惡の念仏すれば救われて往生せしめたたまうことを説かれるのみである。謗法の徒は救われない。永劫に阿鼻大地獄に展転すべきものである。むしろ、永劫に六道を輪回し阿鼻大地獄に入るものを謗法の者というべきである。

西に歩みつつ、東に到る理はない。点される燈もこれをふき消しつつ、明るくなる理はない。正法を内心に誹謗し反逆しつつ、浄土に往生し、成仏するの理はあり得ない。まことに我等は一度この鸞師の冷たき親切の前に、嚴肅に立つべきである。しかして正法を聞きつつ、我が心を凝視深信すべきである。しかれば、鸞師は永遠に謗法の人の救いを許したまわず、説きたまわぬのであろうか。

## 問題

曇鸞大師は、軽々しく誹謗正法の者の助かることを説かれなかつた。「愚痴の人、すでに誹謗を生ず、いづくんぞ仏土に願生するの理あらんや。」と説かれ、それについて五逆の重罪は全てこれ誹謗正法の心より生れるものなるが故に、謗法の罪最も重きことを示して「汝たゞ五逆罪の重きことを知りて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることを知らず。この故に謗正法の人はその罪最重なり。」と誡められた。

しかるに、鸞師はそれについて、五逆罪が念仏の世界において助かることを詳細に説かれる。鸞師云く、

「問うて曰く、業道経に言わく『業道は秤の如し、重き者まず牽く』と。觀無量寿経に言うが如し、『人ありて、五逆十惡を造り、諸の不善を具せむ。惡道に墮して多劫を経歴して無量の苦を受くべし、命終の時に臨みて、善知識、教えて南無無量寿仏を称せしむるに遇わむ。是の如く心を至して声をして絶えざらして十念を具足すれば、便ち安樂浄土に往生を得て、即ち大乘正定之聚に入りて、畢竟して不退ならむ、三塗の諸の苦と永く隔つ。』『まず牽く』の義、理に於いて如何ぞ。又曠劫より己来、備に諸の行を造れる有漏の法は、三界に繫属せり。但十念を以て阿弥陀仏を念じて、便ち三界を出でば、繫業之義、復云何がせむとするや。」

以上の文は、五逆罪が念仏の世界に於いて助かるべきことを説かれるに當つて、罪惡と念仏との軽重の義、及び、繫業と念仏との交渉について問題を提出せられたのである。

## 軽重の義

『業道経』の言を出して問題を提出される。曰く『業道は秤の如し。重きものまず牽く』と。業道の世界では、重き業こそ強く牽くのである。しかるに『觀無量寿経』の

下品下生の文においては、五逆十悪を造つて悪道に墮し、多劫を経歴して無量の苦を受くべき衆生も、もしその臨終に當つて、善知識があらわれ、十念を具足して十声称名すれば、安樂浄土に往生し、即ち大乘正定聚に入りて不退転を得、永く三塗の苦を隔て離れると説かれる。この説にしてもし真なれば、先の『業道経』の説「重き者まづ牽く」の義は如何なるのであるか。其処には一体如何なる理があるのであるか。それが問ひの第一である。

又生死は無始眩劫のことである。眩劫より己来、つぶさに諸の悪行を造り、有漏の業によつて三界に繋がれ、六道に属しているのが衆生ではないか。しかるに、ただ、十念を以て阿弥陀仏を念じただけで、すなわち三界を出ずるといふのでは、「繋業の義」即ち業によつて三界に繋がれているということは、どうなるのであるか。それが即ち第二問である。

以上の問ひに対して、

「答えて曰く、汝、五逆十悪の繋業等を重しと爲し、下下品の人の十念を以て軽しと爲して、應に罪の為に牽かれてまず地獄に墮して三界に繋すべしといわば、今当に義を以つて軽重の義を校量すべし。心に在り、縁に在り、決定に在り、時節の久近、多少に在るにはあらざるなり」と。

先に出だされたる疑問、即ち「重きものまず牽く」の義、及び「繋業の義」等は、その不審を持てるものの心中に、すでに、その根本において間違いを持つてゐる。間違いとは何であるか。即ち五逆十悪等の罪悪は極めて重い罪悪である。確かに重いに違ひない。悪道に墮ちて多劫を経巡つて無量の苦を受くべきである。しかるにその臨終に當つて、善知識に教えられて、十念を具足して阿弥陀仏を念ずれば、浄土に往生する、そのことが信じられないのである。何故ならば、唯十声十念の念仏は如何にも軽いではないか、久遠劫来の十悪五逆は重いではないか。それであるならば、『業道経』の「業道は秤の如し、重きものまず牽く。」の言は如何なるのであるかといふのである。その疑ひに対して、曇鸞大師は、「汝、五逆十悪の繋業等を重し、下下品の人の十念を軽として、罪の為に牽かれて……」と思うが故である。念仏は軽く、悪業は重しとするよりおこるのである、と説かれるのである。

又、繋業の義もまた然りで、下品下生の悪人の念仏は軽く、五逆十悪は重しとするが故におこるのである。「汝、五逆十悪の繋業等を重し、下下品の人の十念を軽として、罪の為に牽かれて、まず地獄に墮して、三界に繋すべし。」と云うのである。

まことに軽々しく考える時、凡夫はかくの如くに考えるであらう。しかれば、何よりもまず、凡夫の五逆十悪が重いか、十念の念仏が重いか、その軽重の問題を決定しなければならぬ。そこで鸞師は軽重の義を校量せられるのである。

在心

鸞師は今や、この重大なる問題について答えんとせられるのである。云く、

「今当に義をもつて軽重の義を校量すべし。心に在り、縁に在り、決定に在り。時節の久近、多少に在るにはあらざるなり。」

軽重の義を量られるに當つて、三つの点から示される。いわく、



- 一、在心
- 二、在縁
- 三、在決定

がそれである。以上の三義にあるのであつて、時節の久近、多少にあるのではない。念仏を軽しとし、五逆十悪を重しとするものは、五逆十悪は久遠劫の長時にわたり、念仏は唯一念の事実なるが故に軽しとするのである。又罪悪は多にして、念仏は十声の少量なるが故に軽しとするのであるが、かくの如く、時節の久近、多少にあるのではない。「心に在り」「縁に在り」「決定に在る」のである。

しかれば、在心、即ち心に在るとは如何なる義であるか。

「心に在り」とは如何なる義であるか。鸞師説いていわく、

「云何が心に在ると。彼の罪を造る人は、自ら虚妄顛倒の見に依止して生ず。この十念は、善知識、方便安慰して、実相の法を聞かしむるに依りて生ず。一は実、一は虚なり。豈、相比ぶることを得むや。譬えば千歳の闇室に光もし漸く至れば則便明朗なるが如し。闇豈に室に在ること千歳にして去らじと言うことを得んや。是れを在心と名く」と。

#### 実と虚

鸞師の答は極めて明瞭である。そもそも罪悪たるや、その根本は智慧の明なきこと、即ち無明によつておこるものである。智慧なければ一切は虚妄であり、したがつて顛倒である。この虚妄顛倒の見解に依つて生ずるものが罪悪煩惱である。しかるに、念9 仏はこの無明より生れず、善知識の大慈悲方便、衆生を安慰せしめんと心の心より説かれる「実相の法」を聞くことによつて生じたのである。善知識の法は、本仏弥陀の本願力である。弥陀法は、真如实相の具体的表現である。智慧慈悲の回向成就である。この実相の法によつて、悪逆の上に念仏道は成就するのである。されば、罪悪は虚であり、念仏は実である。実と虚、真実とそらごとを比較するということは出来ることではない。然り、まことに罪業煩惱は如何に永劫に続くとも虚妄であり、念仏は如来の智慧光さながらの真実である。真実の前には虚妄は何らの力を有するはずがない。真実の心と虚妄の心、問題は心に在る、時の長短にあるのではない。多少にあるのではない。

鸞師は、更にこれを喩えによつて表現せられる。

「譬えば、千歳の闇室に光もし暫く至れば、即便、明朗なるが如し。闇、豈に室に在ること千歳にして去らじと言うことを得むや、これを在心と名づく。」

ただに千年万年はおろか、久遠劫来の闇室であろうとも、一度光が入れば即時に闇は消えて明朗となるであろう。千年の闇なるが故にその闇を去らしむるに数日を要するとうようなことはあり得ない。闇とは光なきことであるが故に、闇に実体なく、一度、光至れば闇は滅するのである。念仏は如来の智慧光そのままの回向であり、罪業は闇の中に執着せられたる虚妄顛倒より生れたものである。されば、善知識の教えによつて十念を具足して念仏すれば、如何なる五逆十悪といえども、その臨終の切迫せる時であるとも助けられるのである。故に、念仏は重く、罪悪は軽い。重き念仏は、

如何なる逆悪をも亡ぼすが故に、三塗に牽くの理はあり得ない。重き大願業力、浄土へ牽くのである。

### 実相の法

「本願力にあいぬれば、むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みち満ちて、煩惱の濁水へだてなし。」

まことに、久遠劫来の悪業煩惱も聞信の一念に救われること、千年の闇も光の入る一瞬に滅ぶが如くである。

されば、「善知識の方便安慰して実相の法を聞かしむる」ことこそは、最重極重の尊さである。もし、善知識の大悲方便の説法なくば、遂に念仏は生れないであろう。宿善開發して善知識をして「実相の法」を説かしめ、聞かしむることこそ、如来光明の調熟の功である。されば、もし虚妄顛倒の凡夫にして、実相の法を聞かしめず、更に虚妄の法を聞かしめんか、その闇は更に深く、罪業は更に重きを加えるであろう。実相の法、真実の法を聞くべきである。もし、たとえ念仏の法を説くとも、人間の迷妄を混入せんか、到底、鸞師の「在心」の説を如実ならしむることは出来ないであろう。我等は不幸にして、至る所、邪義横行し、迷信邪教の流布せられるを悲しむ。まことに純粹至純の大法を聴聞すべきである。

以上、觀經の説の五逆十悪の悪人が十念の念仏によつて救われて浄土に往生することを説かれるに当つて、曇鸞大師は、五逆十悪が重いか、十念の念仏が重いか、その軽重の義を校量るに当つて、

「心に在り、縁に在り、決定に在り、時節の久近、多少にあるにはあらざるなり。」と説かれるを頂いて来た。しかしてまず、在心の説について述べて来た。

『六要』には、この在心、在縁、在決定を、心と境と時とに約するとせられ、又あるいは、因と縁と時との別であるともせられた。心、境、時にしても、因、縁、時とするにしても、この在心即ち、十念の心こそは心因であつて、最も大切一大事であることが思わせられる。

「云何が心に在る。彼の罪を造る人は、自ら虚妄顛倒の見に依止して生ず。この十念は、善知識、方便安慰して、実相の法を聞かしむるに依りて生ず。一は実、一は虚なり、豈、相比ぶることを得むや。」

まことに、十念こそは、善知識が方便安慰して「其名号を聞」かしむることによつて生ずる「信心歡喜」であり、觀經の「如是至心」である。「是の如く至心に声をして絶えざらしめて十念を具足す」るのであつて、如来真実の本願さながらの至心、まごころである。しかるに三界流轉の凡夫は、如何にそれが無始已来の事であろうとも、因が虚であるが故に、果もまた妄である。虚妄の闇室は真実実相の光の前には、即便、明朗たらざるを得ないのである。

されば「彼の罪を造る人は、自ら虚妄顛倒の見に依止して生ずる」のであつて、心によるのである。しかして、それが救われるのも亦、「如是至心」の信心、即ち心によるのである。まことに鸞師のこの在心の説法、頂戴すべきである。流轉か、往生か、

それは「心」によるのである。心如何にあるのである。であるから、心そのものを問題として善知識の教えを無我忠実に聞くべきである。

## 在縁

次に、在縁について説かれる。いわく、

「云何が縁に在ると。彼の罪を造る人は、自ら妄想の心に依止し、煩惱虚妄の果報の衆生に依りて生ず。この十念は、無上の信心に依止し、阿弥陀如来の方便莊嚴、真実清浄、無量功德の名号によりて生ず」と。

「心に在り」と因を説かれたが故に次には、縁を説かれるのである。因には必ず縁があり、縁によりて因を生ずるが故である

「云何が縁に在る。彼の罪を造る人は自ら妄想の心に依止し、煩惱虚妄の果報の衆生に依りて生ず。」

罪悪の衆生は、自らの妄想顛倒の心を依りどころとし（在心、因）、この因に、やはり同じく煩惱虚妄の果報を受けつつある衆生に依り、これを縁として罪悪を造るのである。譬えば、阿闍世王が提婆達多の誘惑によつて、殺父殺母の五逆罪を犯したが如きものである。煩惱成就の衆生を縁とし、相手とせずして罪悪を造ることは出来ない。しかるに流転の衆生が罪悪煩惱の悪友悪知識を縁として罪悪を造るに反して、十念の念仏は「無上の信心」に依つて起るものであつて、阿弥陀如来の方便莊嚴、即ち三種莊嚴二十九種の浄土の莊嚴、真実清浄の徳（浄土の略相）及び無量功德を内具せる如来の名号によつて出て来たれるものである。これ先述のいわゆる「実相の法」を聞くという縁によつて生じたるものが、十念の念仏である。即ち罪悪は煩惱の衆生を相手とし、之は阿弥陀如来を増上縁として成就せるものである。縁が勝れてゐるが故に、十念の念仏は重く、五逆十悪の煩惱は軽いのである。十念の念仏によつて無始生死の罪消えて往生の身となるは当然と云うべきである。

## 在決定

次に第三の「決定」について鸞師云く、

「云何が決定に在ると。彼の罪を造る人は、有後心、有間心に依止して生ず。この十念は、無後心、無間心に依止して生ず。是を決定と名づく。三の義を校量するに、十念は重なり。重きものまず牽きて能く三有を出ず。両経一義なるならくのみ」と。

鸞師は第三に「決定に在り」と言われる。何を言わんとせられるのであるか。いわく、「彼の罪を造る人は、有後心、有間心に依止して生ず」と。有後心とは、後有りと思ふ心、即ちこれより後猶生きておるといふ余裕のある心のことである。無常を知らぬ心であり、生きておられるという「死」を見ない心である。有間心とは、臨終をつきつめないが故に、心に様々なる余念雑念が間雑ることである。まことに罪悪を造る者は、この有後心、有間心とに依るのである。

しかるに、「この十念は、無後心、無間心に依止して生ず。」無後心とは、臨終せつぱつまつた時の心であつて、「最後の心」、後無しと信ずる心であり、それ故に無間心とは、緊張して余念を間雑えざる心である。

まことに平生の時、人はおおむねふざけている。しかるにその臨終に至るや、死を眼前に望むが故に、多くの者は厳肅に緊張して、平生の造罪不決定の心に反して、余法を念ぜず、問題を遠くに眺めず、直ちに弥陀大悲の教命に信順するのである。我等はまことにこの鸞師の「決定に在り」の説に共鳴せざるを得ない。重症大患の床に横たわるものは、多くの場合、たちどころに信心決定して念仏するのである。特に死を宣告せられ、決定必定死を覚悟せる人は、多くの語を要せずして念仏の人となる、我等はあまりに多くその例を見て来ている。

智度論廿四には、

「問うていわく、死に臨める時、少許の時の心、云何が能く終身の行力に勝るや。答えていわく、是の心、時頃少なりと雖も、而も心力猛利なり。火毒の箭、少しと雖も大事を成す。是の死に垂とする時の心、決定健なるが故に、百歳の行力に勝る。是の後心を名づけて大心と為す。捨身及び諸根の事急なるを以つての故に。人、陣に入れば身命を惜しまざるを健と名づくるが如し」と。

『安樂集上』には、この文の意を引き、一切衆生臨終の時は死苦にせめられるが故に、大なる怖畏を生じ、この故に善知識に遇うて大勇猛心をおこし、十念相續するが故に、増上の善根を以て往生することを明かされ、横川の源信和尚は、『往生要集下末』に、

「在決定とは、造罪の時は、有間心有後心を以てなり。念仏の時は、無間心無後心を以て、遂に即ち命を捨つるまで善心猛利なり。是を以て即ち生ず。譬えば十圍の索は千夫も制せざれども、童子剣をふるわば、須臾に兩段するが如し。又千年の積草に大豆ばかりの火を以て之を焚く時は、即ち尽くるが如し。又人有りて一生より已来、十善を修して当に天に生ずることを得べきに、臨終の時、一念決定の邪見を起せば即ち阿鼻地獄に墮するが如し。悪業の虚妄すら猛利なるを以ての故に、尚能く一生の善業を排して悪道に墮せしむ。豈に況んや臨終の猛利心の念仏、真実無間の善業、無始の悪業を排ふこと能わずして、浄土に生まるることを得ずんば、是の処あること無し。」と説かれた。これ全く鸞師と同一の世界を明らかにせられたものである。

以上の如く、猛利なる無間心、無後心における十念をさして、決定に在りと言われたのである。

以上の三義、在心、在縁、在決定の三義によるが故に十念は重い。重いが故に、「重きものまず牽く。」という『業道経』の所説と、『観経』の所説とは同一といふべきであるとせられるのである。

### 三義一念同時

以上によつて、如何なる五逆十惡の悪人、下品下生の凡夫も、臨終に當つて善知識にあい、その教えによつて名号を聞信して念仏すれば往生することがわかつた。これ十念往生の義の成立を示されたのである。以上の三義を表示すれば、

心……能信 (信心歡喜)

……平生

縁……所信 (聞其名号)

決定・・・(即得往生住不退転)・・・臨終

以上に於いて「決定」は『觀經』の文の当面に「命終の時に臨んで、善知識の人をして」とあるに忠実ならんとするが故に、決定を臨終におかれたのであるが、しかし、これは決して臨終に限ったことではないのである。平生の時、善知識の言の下に、帰命の一念を發得すれば、その時、即ち臨終なのである。ここでは特に時を臨終に切迫せしめて、決定の易きを示されたのである。聞其名号の縁によつて、信心歡喜の心があり、同時に即得往生住不退転と決定するのであつて、三義は一念に同時に成就するのである。されば、平生の時、真に聞其名号すれば、信心歡喜して決定するのである。尚、「十念」を鸞師は説いて、

「經に十念と言うは業事成弁を明かすならくのみと、必ずしも須く頭数を知るべからず。」

と言われる。即ち十念とは、往生の業事が成弁、「できあがる」ことを示されたので、念仏の数を覚え数えて称えよ、と言われるのではないとせられたのである。鸞師はそれを喩えて、「蟬は夏鳴く」というけれども、蟬が春夏秋冬を知っているのではない、それは知つておる人が言うのである。それと同じく衆生は唯、專念相續して往生するのであつて、数を覚える必要なきを示されたのである。

#### 抑止門の意

私は「唯除五逆誹謗正法」の問題について長い間、曇鸞大師の教えを頂戴して来たこの問題について鸞師の教説がつきたのではない、が、しかし、私は今、一時、曇鸞大師より眼を善導大師に移して、その教説に聞き、更に鸞師に帰りたいたいと思う。

御本典信卷に引用したまいし善導の『散善義』の文にいわく、  
「光明寺の和尚(善導、散華義)のいわく、

問うて曰く、四十八願の中の如きは、唯五逆と誹謗正法とを除きて往生を得しめず、今この觀經の下品下生の中には、謗法を簡いて五逆を撰せるは、何の意か有るや。

答えて曰く、この義仰いで抑止門の中に就いて解す。四十八願の中の如き、謗法五逆を除くは、しかるにこの二業、其の障り極重なり。衆生もし造れば、直ちに阿鼻に入りて、歴劫周章して出づべきに由無し。但如来、其れ斯の二の過を造らむを恐れて、方便して止めて、往生を得ずと言えり。亦是れ撰せざるには不るなり。又下品下生の中に、五逆を取りて謗法を除くことは、それ五逆は已に造れり、捨てて流転せしむ可からず、還りて大悲を發して撰取して往生せしむ。しかるに謗法の罪は未だ為らざれば、又止めて、もし謗法を起さば即ち生ずることを得じと言う。此は未造業に就きて解するなり。もし造らば還りて撰して生を得しむ。」

以上の文において、善導大師はまず、『大經』の四十八願を説かれるに當つては、「唯五逆と誹謗正法とを除きて往生を得しめず」と説かれ、しかるに、『觀無量壽經』の下品下生を説かれる中には、誹謗正法を簡ひて除き、五逆のみを撰取するは、何の義であるかと、問題をおこし、これに答えて、「この義仰いで抑止門の中に就きて解す。」と言われた。如来は、衆生の五逆と謗法とを抑え止められるのである。即ち如来の大

悲は衆生の逆悪を抑止せんとせられるのであって、大悲より除かれて救われないのではないといわれるのである。

されば大師は、この抑止門の意を説いて「四十八願の中の如き、謗法と五逆とを除くは、しかるに此之二業、其の障極重なり、衆生もし造らば、直ちに阿鼻（無間地獄のこと）に入りて、歴劫周章して出づ可きに由無し。但如来其れ斯の二の過を造らむを恐れて、方便して止めて、往生を得ずと言えり。亦是を撰せざるには不るなり。」と断定せられた。

即ち、五逆と謗法とは極重の罪業である。もし一度造らば、衆生は無間地獄に墮ち、永劫大苦惱の中に入りて出づることが出来ない。故に如来はこれらの罪業を造ることを恐れて、方便して止めて、往生を得ずと言われるのである。これを撰取せられないのではないと、この唯除の言の上に、還つて抑止の大悲を拝せられたのである。「唯除五逆謗正法」とは、如来が悪逆の衆生に対する冷たき勘当の離縁状ではなくて、どうしても撰取しなくてはおかぬ者への、抑止の大悲の現われであるとせられたのである。

衆生は、五逆と誹謗正法との大罪を犯しつつ、少しもその恐るべきを知らぬものである。いよいよ逆悪の中に墮ちつつ、その恐るべき大罪たるを知らぬものである。もし、この逆悪が、そのままにおかれる限り、永劫に自覚しないであろう。衆生は大悲を知らねばならぬ。大悲によつて覚まされて、抑止の嚴戒を知らねばならぬ。造れば、阿鼻の苦を受くべきものである。しかし必ず救われねばならぬ。もし逆謗が永久に、真に除かれるならば、一切衆生は遂に一人も救われないであろう。衆生は五逆謗法によつて永劫の地獄に入る。しかも大悲によつて救われぬ限り、永劫の苦を出ずることは出来ない。衆生が、五逆謗法の極重罪業たるを知らねば、大悲をたのむことをしないであろう。抑止しつつ、しかも、撰取される大悲の意味がここにある。

「方便して、止めて、往生を得ずと言えり。亦是を撰せざるには不るなり。」との御文、「方便して」とは大悲のこと、「止めて」とは抑止のこと、「往生を得ず」とは抑止の意、「亦是を撰せざるには不ず」とは、抑止の意の底に動いている大悲本願の真実である。

### 已造未造

しかれば、何故に五逆罪は撰取されて救うと説き、謗法はこれを救うと説かれないのであるか。この大経の世界と、觀經の世界との相違を、善導は如何に領解せられるのであろうか。光明寺のいわく、

「又下品下生の中に、五逆を取りて、謗法を除くことは、其れ五逆は已に作れり、捨てて流転せしむ可からず、還りて大悲を発して撰取して往生せしむ。しかるに謗法之罪は未だ為らざれば、又止めて、もし謗法を起さば、即ち生ずることを得じと言う。此は未造業に就きて解するなり。もし造らば、還りて撰して生を得しめむ。」と。

これ大師の答えである。これが大師の「已造未造の説」と言われる明釈である。

大師の積によつて我等は、五逆と謗法との關係を知ることが出来る。即ち、五逆罪は已に造られたる罪であり、誹謗正法とは未だ造られざる罪である。五逆罪は形の上  
に現れ、事実となつた罪悪であり、謗法はその背後に動く潜在的な本罪である。

もし「仏もなし、法もなし、僧もなし」との三宝に対する叛逆がそのまま、現われて事案とならぬ限り、五逆罪とはならない。しかし、父を殺し、母を苦しめ、一切の聖賢を斃たおさんとするが如き恐るべき罪悪は、その源を何処に発するのであるか、一切の社会悪、人間生活の醜状は、その根本をこの謗法に発するのである。多くの人間は、事実において父母を殺し、聖者を倒す等の悪行を働きはしない。それは、国法の刑罰があり、社会的制裁があり、我が身の破滅を来すが故である。

しかし、父を悪み、母を呪うも、その悪性は殺父、殺母である。長者に対する叛逆も、無道義も、その性質は福田に対する叛逆心、即ち五逆の変形である。一切の家庭苦、社会悪等にも、その根本の問題は五逆罪によるのではないか。両親が温和なる人格者なるが故に、その前に孝行者らしき者も、もし、我慢強き父母を持たせたる時、果たして孝行人で在り得るかは疑問である。

一切衆生はその縁次第によつては、如何なる罪惡を犯すやも知れざるは、その無意識界に、謗法の本罪を持てるが為ではないか。謗法とは、ただに口に誹謗するのみのことではなくて、その全人格を以つて、三世一貫の眞実、除疑獲証の眞理に叛逆せんとする根本的な力である。眞理に対する叛逆、この無明、この痴愚、この惑より一切の苦を生ずるのである。されば、これが業苦と分離抽象される限り、「しかるに謗法之罪は未だ為らず」と言われるのである。已に意識の世界に現行すれば五逆となるものである。まことに衆生の体内には、やがて恐るべき、病相、病苦を出現せしむる病毒病菌をその血液内に持てるものである。しかもそれが醜みにくき病相、病苦とならざる限り、治療を求めず、治療を為すべき契機なきものであろう。

### 若造還撰

「下品下生の中に、五逆を取りて謗法を除くことは、其れ五逆は已に作れり、捨てて流転せしむ可からず、還りて大悲を發して撰取して往生せしむ。しかるに謗法之罪は未だ為らざれば、又止めて、もし謗法を起さば即ち生ずることを得じと言う。此は未造業に就きて解するなり、もし造らば、還りて撰して生を得しめむ」と。

我等はまことに、この大師の妙積の前に、如是々と讃言を捧げざるを得ないと共に、如来本願の大悲善巧を崇仰しないではいられない。「もし造らば、還りて撰して生を得しめむ。」大悲本願の活躍、弥陀の方便の時機は、実に、王舎大城に五逆の火の上つた時であつた。提婆、阿闍世等によつて、五逆の病、王舎城に生じこる時、大医王釈迦牟尼仏は、その家伝の妙薬を用い、大手術のメスを奮うの好時機を得、悲劇の主人公、韋提希の願求によつて、即便微笑して、火中の蓮華を生ぜしめたのであつた。

それより後、今日迄、三国に互つて、億々の阿闍世や韋提希が五逆を造り、還つて撰取されて往生を得たのである。

衆生は、苦悩に陥らざる限り、救いを求めず、如何に名医ありとも、その手術を受けざるものである。しかるに五逆罪には、必ず人間苦の劇苦をともない、憂悩を受けるが故に、憂悩なき世界を求めるのである。そしてそれが如来本願のはたらきたまう契機となるのである。しかして名医は、病苦病状を衰えしめ、やがて全治せしめるためには、その病源をさぐり、病根をつきとめて、その根本を切開摘出し、あるいはその病菌を全滅せしめて、病を治するのである。

されば、未だ為らざる謗法の罪これを治療するにその術なく、造らず為さざる限り、如何なる悪人も、之れを匡正するに由なきが故に、病菌漸くその全身にめぐり、五逆の重病苦悩となる時、その五逆にあてられたる名号のメスは還りて、その五逆罪を通して、誹謗正法の本罪を破りて、衆生をして信心成就せしめ、「還りて撰して生を得しむ」るのである。

しかして、誹謗正法は必ず五逆罪となつて現われるが故に、五逆罪を撰取して、謗法を往生し得ずと言われる経の意も亦、知るべきである。大師の己造未造の説、まことに真実と言ふべきである。

### 方便化土

しかるに、下品下生の機が、臨終切迫の時、はからずも善知識に会い、「此の如きの愚人、命終の時に臨み、善知識の種々安慰して為に妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。この人、苦に逼められて念仏するに違あらず、善友告げて言わく、汝もし念ずること能わずば当に無量寿仏を称すべしと、是の如く至心に声をして絶えざらしめて……」と、眞実信心成就することが出来ないで疑惑の本罪を持ちつつも、称名念仏することを説けるものが『観無量寿経』の下品下生である。かかる念仏の行者すら往生するのである。

善導大師は、

「……もし造らば還りて撰して生を得しめむ、彼に生を得と雖も、華合して多劫を経む。此等の罪人、華の内に在る時、三種の障有り、一には仏及び諸の聖衆を見ることを得じ、二には正法を聴聞するを得じ、三には歴史供養することを得じと。此を除きて己外は、更に諸の苦無けむ。経にいわく『猶、比丘の三禪の樂に入るが如きなり』と、知る應し。華の中に在りて多劫開かずと雖も、阿鼻地獄の中にして、長時永劫に諸の苦痛を受けむに勝れざる可けむや。この義、抑止門に就きて解し竟んぬと。」と説かれた。

この十九願の世界、観経の願門につきて釈せられたものであつて、自力の行者は化土の華中に胎生して、仏、法、僧の三宝を見ざるも、如来の本願に救われて、長く三塗の難を免れしめたまう大悲の至極を示されたのである。まことに十悪五逆の悪人も念仏すれば助かる本願の不思議、頂くべきである。久遠の疑惑の本罪、破れつくさずと雖も、念仏すれば化土に得生せしめたまうと言ふ、抑止門の義、いよいよ明らかと言ふべきである。



善導の釈文に於て、はからずも、下品下生の衆生が、称名しつつも自力を混入するが故に、方便化土の華の中に入って三宝に会わざるも、大悲によつて地獄に入らざることを聞いた。『大無量寿経』においては、真実に報土に往生するものを「化生の者」と言われ、如来の智慧を疑惑しつつ念仏するものは、宮殿に生じ、五百歳、常に仏を見ず、経法を聞かず、聖衆を見ず、「是の故に彼の国土に於いて之を胎生と謂う」と説かれた。

しかしてこの胎生の者と、化生の者との差異を説いて、「弥勒、常に知るべし、彼の化生の者は、智慧勝るが故に。其の胎生の者は皆智慧無し。」とて、二者の違いを智慧の有無に帰結せられ、その生活の差を、三度くり返して、三宝を見聞せざることにありとせられた。しかして智慧の有無は、何によつて決定するのであるか。いわく、仏智を疑惑する者は智慧なきものであり、仏智を信ずる者は智慧あるものである。

大経に言わく、

「仏智を疑惑するを以ての故に彼の宮殿に生ず、刑罰乃至一念の悪事有ること無く、但五百歳の中に於て三宝を見ず、供養し諸の善本を修することを得ず、此を以て苦と爲し、余の樂有りと雖も、猶、彼の処を樂わず。もしこの衆生、其の本罪を識り、深く自ら悔責し、彼の処を離れんと求むれば、即ち意の如く無量寿仏の所に往詣し、恭敬供養することを得。亦、偏く無量無数諸余の仏の所に至り、諸の功德を修することを得ん。弥勒、當に知るべし、其れ菩薩有りて疑惑を生ずる者は大利を失うと爲す。是の故に應當に明らかに諸仏の無上智慧を信ずべし」と。

以上の経説によれば、仏智を疑惑するところの皆無智慧の者も「其の本罪を識り、深く自ら悔責し」て、仏智を信ずれば、「身相光明、智慧功德諸の菩薩の如く具足し成就す」るのである。即ち、疑惑とは本罪である。根本の罪である。世尊はこの本罪を本罪と識つて、「深く自ら悔責す」べきことを説かれる。回心懺悔の問題がここにある。

## 二大師の説

既に、この唯除五逆誹謗正法の問題について、曇鸞大師の親切なるみ教を頂いた。鸞師は天親菩薩の願生偈の回向文に、「普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せしめたまへ。」とのたまえるを説かれるに當つて、「此れは何等の衆生を共に指したまうや」と問いをおこし、ついに「明かに知んぬ。下品の凡夫、但、正法を誹謗せざれば、信仏因縁をして皆往生を得しむ。」と断定せられ、下品の凡夫も、皆、往生すとせられて、浄土論に天親論主の明し給わざる、救われる衆生の何たるかを明にせられた。しかし更に、觀經に「五逆を救う」と説かれ、大経に、「唯五逆と正法を誹謗するをば除く」と説かれたるについて、

「この二経云何が会せむや。答えて曰く、一経には二種の重罪を具するを以てなり。一には五逆、二には誹謗正法なり。この二種の罪を以ての故に、所以に往生を得ず。一経は但、十悪五逆の罪を作るとのたもうて、正法を誹謗すと言わず、正法を謗せざるを以ての故に、是の故に生を得しむ。」

と説かれ、やがて、

「ただ正法を誹謗せしめて更に余の罪なしと雖も、必ず生を得じ」と言い、

「誹謗正法の人は、阿鼻大地獄の中に墮して、この劫もし尽きれば、復転じて他方の阿鼻大地獄の中に至る。是の如く展転して百千の阿鼻大地獄を逕。仏出づることを得る時節を記したまわず。誹謗正法の罪極重なるを以ての故なり。」と示して、遂に、

「この愚痴の人既に誹謗を生ず、安んぞ仏土に願生するの理有らむや。」と止めをさされた。まことに鸞師の説、誹謗正法の者の断じて安樂に生ずる謂れなしとせられる、真に当然と言うべきである。

しかるに、善導大師は先の引文の如く、

「但如来、斯の二の過を造らむを恐れて、方便して止めて、往生を得ずと言えり。亦是れ撰せざるには不るなり。又下品下生の中に、五逆を取りて謗法を除くことは、其れ五逆は己に作り、捨てて流転せしむ可からず、還りて大悲を發して撰取して往生せしむ。」

と、この問題を抑止門の意とせられた。この善導大師の説、亦極めて当然と言うべきである。もし最極重の罪人たる謗法の者が、もし徹頭徹尾、大悲本願によつて救われないならば、如来の本願も亦、底なき大悲ということとは出来ない。永遠の阿鼻地獄に入るものを、永久にすててかへりみ給わぬはずはあり得ない。

我等は、曇鸞大師と善導大師とのこの共に真実なる説を如何に会通すべきであろうか。両師の説は全く矛盾するであろうか。

#### 立論の相違

曇鸞大師の真意果して奈辺にあるのであろうか。謗法の者は遂に永遠に救われなと言われるのであろうか。善導大師は、抑止門であると決定せられ、

「五逆罪は己に造れり、捨てて流転せしむ可からず、還りて大悲を發して撰取して往生せしむ、しかるに謗法の罪は未だ為らず、又止めて、もし謗法を起さは即ち生を得じと云う。此れは未造業に就て解するなり。もし造らは還りて撰して生せしむ。」と説かれる。

然らば 五逆罪を造りさえすれば、救われると言われるのであろうか。そのはずは決してあり得ない。

憶うに、この両聖の相違は、善導大師は如来の本願大悲の上に立つて立論せられたのである。「五逆は己に作り、捨てて流転せしむべからず、還りて大悲を發して撰取して往生せしむ。」とは、これ全く大悲胸中の消息ではないか。本願の意ではないか。しかるに、曇鸞大師はあくまで衆生の機に立ちて立論せられたのである。だから見よ、「下品の凡夫ただ正法を誹謗せざれば、信仏因縁をしてみな往生を得しむ」と。信仏因縁とは下品の凡夫の機の事実である。正法を誹謗せざるも衆生の機である。又曰く、

「愚痴の人すでに誹謗を生ず、安んぞ仏土に、願生するの理あらむや。」更に云く、

「問うて曰く、何等の相か是れ誹謗正法なるや。答えて曰く、もし無仏、無佛法、無菩薩、無菩薩法と言わむ、是の如き等の見をもて、もしは自ら解り、もしは他に従いて、その心を受けて決定するを、皆誹謗正法と名く」と。

以上、皆衆生の機に立ちて立論せられたのである。先の『論註』の引文をその気で読めば、全文悉くそれであることがわかるであろう。

### 回心皆往

大悲は如何なる衆生をも摂取せんとし、世尊は本願文に抑止門を添えて、「唯除」とのたまう。曇鸞は、正法を誹謗すれば永劫無間大地獄に入ると嚴戒し、善導は造らば摂取したまうと言われる。かかる問題の相違を解く鍵は何処にあるのであろうか。

憶うに、これは、「回心」の問題である。善導大師、『法事讚』に云く、

「仏の願力をもつて、五逆と十悪と罪滅し、生を得しむ。謗法闡提、回心すれば皆往く」と。

大師が一切衆生皆往生することを得と説かれ、大悲は全て摂取すると説かれるのも、「回心すれば、皆往く。」と仰せられるのであつた。されば、

「今人身を得て、貪して罪を造り諸仏の聖教に非毀を生ず。聖教を非毀する罪根深し、良善を謗説して苦に常に沈む。大聖神通力有りと雖も、能く相い救うこと無くして益悲心す。今道場の時衆等を勸む。罪の無窮なるを発露懺悔せよ」と。(法事讚)

以上の如き沈痛なる懺悔の言を、幾度か幾度かくり返したまう大師の深意、まことに頂くべきである。迴心懺悔せざれば、大聖世尊も遂に救いたまうことは出来ずして、ますます悲しみたまうと言われる。以て知るべきである。大師も衆生の機の現実に立ちたまう限り、回心懺悔を説きたまうのであつた。

しかれば、曇鸞大師は如何に考えたまうのであろうか。論註下にいわく、

「衆生、傲慢を以ての故に、正法を誹謗し、賢聖を毀訾し、尊長（尊とは君父師也、長とは有徳之人及兄黨也）を捐片す。是の如きの人、拔舌の苦、瘡瘻の苦、言教不行の苦、無名聞の苦を受くべし。是の如きらの種々の諸苦の衆生、阿弥陀如来の至徳の名号、説法の音声を聞かば、上の如きの種々の口業繫縛、皆解脱を得て、如来の家に入りて、畢竟して平等の口業を得」と。

ここに明らかに、「衆生傲慢を以ての故に、正法を誹謗」するも、「阿弥陀如来の至徳の名号、説法の音声を聞かば・・・みな解脱を得る」ことが出来ると説かれた。名号を聞き、真実の教えの説かれるを聞く者は、必ず、自力の悪心を回心懺悔して、信心歡喜する。ここに、誹謗正法とは、阿弥陀如来の至徳の名号、説法の音声を聞かぬ者のことであつた。聞けば即ち信心の智慧、仏智を信するが故に智慧を得るのである。信心の人がどうして、「仏もなし、仏法もなし、菩薩もなし、菩薩の法もなし」と言おう。鸞師の説の如く

「かの罪を造る人は、自ら虚妄顛倒の見に依止して生ず、この十念は、善知識方便安慰して、実相の法を聞かしむるに依りて生ず、一は実、一は虚なり、豈に相比ぶることを得むや。譬えば千歳の闇室に光もし暫く至れば、即便明朗なるが如し。闇豈に室に在ること千歳にして去らじと言うことを得むや。」

久遠劫来の誹謗正法も、聞信一念の光によつて滅ぶ。

ここにおいて、曇鸞大師の説も、善導大師の真意も、その信心海においては同一あることが知られる。曇鸞大師は、回心せざる謗法の機について説かれ、善導大師は、回心懺悔を前提におき、大悲の心によつて一切の救われることを説きたまうのである。我等は「唯五逆と正法を誹謗するをば除く」との問題について、両大師の教説を聞き了つたのである。ついで我が聖人の領解を聞かなければならない。

### 難治の三病

聖人は、信巻末において、実に多くの紙数を費やしてこの五逆謗法の問題に答えられた。即ち、真仏弟子論を了えて後、新たに問題を提出せられて曰く、

「夫れ仏、難治の機を説きて、涅槃經にいわく、迦葉、世に三人有り、其の病治し難し。一には謗大乘、二には五逆罪、三には一闡提なり。是の如きの三病、世の中に極重なり。悉く声聞、縁覚、菩薩の能く治する所に非ず。善男子、譬えば、病有れば必ず死するに、治無からんに、もし胆病随意の医薬有らむが如し。もし胆病随意の医薬無からむ、是の如きの病、定んで治すべからず、当に知るべし。是の人必ず死せん」と疑わずと。善男子、是の三種の人、亦復是の如し。仏菩薩に従いて聞法を得己りて、即便能く阿耨多羅三藐三菩提心を発せむ。もし、声聞縁覚菩薩有りて、或は法を説き、或は法を説かざる有らん、其をして阿耨多羅三藐三菩提心を発さしむること能わず。」と。

以上の文こそは、大經における唯除五逆誹謗正法の問題をば、涅槃經の上に見出されて、やがてその解答を求めんとせられるのである。一には謗大乘とは、誹謗正法であり、二には五逆罪、三には一闡提、一闡提とは、ついに大乘を誹謗して、仏性の根腐れて、再び菩提心を発す望みの絶えたる者のことである。

かくの如き三人は、難治の三病と言われ、難治の三病は、「声聞、縁覚、菩薩の能く治する所に非ず」と説き、次いで、人の病の譬えをかりて、その病の癒えるか否かは、胆病随意の医薬の有るか無いかの問題であることを示して、「是の三種の人、亦復是の如し。仏菩薩に従いて聞法を得己りて、即便能く阿耨多羅三藐三菩提心を発せむ。」と示される。これを以てこの意を推するに、仏のみこの難治の三病を治し給うことを示さんとせられるものの如くである。

### 無根の信

聖人それより、更に長々と涅槃經の文を引かれた。その涅槃經の文とは、王舎大城の阿闍世王を中心として、提婆達多の誘惑によつて、三宝を謗り、父王頻婆娑羅を殺し、母后、韋提希夫人を七重の牢に監禁する等の五逆罪が行じられ、其後、阿闍世王が自らの罪を悔いはじめ、六師外道の教えによるに救われず、遂に耆婆大臣の導きによつて世尊のみもとに到り、その大悲の教説によつて救われて行く様が出されてある。しかして救われた阿闍世は、世尊に向つて、

「世尊、我世間を見るに、伊蘭子従り伊蘭樹を生ず。伊蘭より梅檀樹を生ずるをば見ず。我今始めて伊蘭子従り梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子は我身是なり。梅檀樹

は、即ち是れ我が心の無根の信なり。無根は、我初めて如来を恭敬せむことを知らず法、僧を信ぜず。是れを無根と名づく。世尊、我もし如来世尊に遇わずば、当に無量阿僧祇劫に於いて、大地獄に在りて無量の苦を受くべし。」

と、無根の信を獲たることを歡喜し感謝した。之れ、謗大乘、五逆等の、難治の三病が、世尊大医王の教えによつて救われたる実例をまず示されたのである。かくして涅槃經の説が終わるや、聖人は遂に結論を出された。

「是を以て、今大聖の眞説に拠るに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、斯れを矜哀して治す。斯れを憐愍して療したまう。喩えば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の真心を求念す應し。本願醍醐の妙薬を執持す可きなり。知る應し」と。

これ全く「今大聖の眞説に拠るに」と涅槃經より帰納して、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の大信海に帰入すれば、醍醐の妙薬の一切の病を治療するが如く、仏の大慈悲によつて救済したまうが故に、一切衆生は金剛の真心を獲て、念仏すべきである。本願の大信に執持すべきであると、一切衆生にすすめたまうたのである。無根の信とは他力回向の大信のことである。

### 真心徹到

以上より推すに聖人の眞意は明瞭である。謗法、五逆、一闡提は救われておらぬ者である。難治の重病人である。しかも世尊はこの三病を救わんとせられるのである。特に、如来の本願は、これを矜哀し憐愍して救いたまわんがために、その大悲本願を成就せられたのである。本願弘誓は、衆生に顕現して、金剛不壞の真心を成就する。されば既に聖人は、

「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念之夕、大般涅槃を超証す。……加之、金剛心を獲る者は、則ち韋提と等しく、即ち喜悟信之忍を獲得すべし。是れ則ち往相回向之真心徹到するが故に、不可思議の本誓に藉るが故なり。」

と出しておられる。金剛の真心は、如来の本願力によつて、衆生の機に於て成就する。衆生に於いて成就する限り、衆生にあつては、「念仏の衆生は、横超の金剛心を窮む。」と言われる。しかしながら、衆生自らが成就したるものではないが故に、無根の信である。

金剛心を獲得することによつて、難治の三病は対治せられる。しかしながら、聞信の一念以前に、恭敬念仏する以前に、難治極惡の三病があつたからとて、救われないのではない。如来の真心徹到して、この三病は破滅対治せられるのである。病がないのに救うということは意味がないし、如何なる病でも治し得ないならば、大医王とは言われない。

されば、聖人一流の御勸化は念仏を正信すべしと、一代を挙げて金剛の真心、信心獲得を高調したまい、信心正因称名報恩の宗教原理を光闡したまうの眞意、知るべきである。「大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰せよ」との教えこそ、眞に第一義、一大事因縁と云うべきである。

以上の如く断言して後、聖人は更に、問題を提起して、

「夫れ諸大乘に拠るに難化の機を説けり。今、大経には『唯除五逆誹謗正法』と言ひ、或は『唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人』と言えり。觀經には、五逆の往生を明して謗法を説かず、涅槃經には難治の機と病とを説けり、斯等の真教、云何が思量せむや。」  
と示され、これに報えるに、既に、前に詳説したる曇鸞大師の論註の文を引き、善導大師の散善義及び法事讚の文を引かれ、終りに「最勝王經疏」の五逆の説明を載せて、何事をも自釈せずして信卷を了られた。これ全く、兩大師の説によつて、聖人の結論の妥當なることを示されたのである。「仏願力を以て、五逆と十惡と、罪滅し生を得しむ。謗法闡提、回心すれば皆往く。」（法事讚）との光明寺の説と全く同一の信境にいたまうこと知るべきである。

## 死骸

聖人、『尊号真像銘文』にいわく、

「唯除五逆誹謗正法というは、唯除はただ除くということばなり、五逆のつみびとをきらい、謗法のおもきとがをしらせむとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとせむとなり」と。

一切の衆生の皆漏れず救われるのである。しかしながら釈尊の大悲は、二つの罪の重きことを知らせんとしたまうのである。まことに頂くべきである。五逆謗法の罪は重い。極重の大罪である。しかるに念仏の行者、軽々しく救いを弄んで、この身のままと、たかをくくり、一夕の法話皆までいらずと軽々しく甘えて、真劍に聞かず、しかも、自ら五逆謗法の極重惡人たることを知らず、二つの罪の重きことを知らず。かかる人に何で沈痛なる懺悔があり、回心があるう。五逆謗法のまま救われているのではない。救われて、この重罪に覚め、回心し、転成せしめられて救われるのである。されば聖人、行卷に云く、

「海と言うは、久遠従り已來、凡聖所修の雜修雜善の川水を転じ、逆法闡提、恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧眞実、恒沙万徳の大宝海水と成る、之を海の如きに喩うるなり」と。

又いわく、

「願海とは、二乗雜善の之中下の屍骸を宿さず、何に沉んや、人天の虚仮邪偽の善業、雜毒雜心の死骸を宿さんや」と

正信偈にいわく、

「凡聖逆謗齊しく回入すれば、衆水海に入りて一味なるが如し」と。  
如来の本願は、凡聖の行ずる一切の善も、逆謗闡提の大惡も、全てを之れを転じて、眞実功德と成したまうのである。この一切を転成して、名号の大宝海に融かしたまうによつて、「煩悩の水解けて功德の水と成る」のである。「二乗雜善の中下の屍骸」とは、大経の説によれば、仏を除いて、声聞、菩薩、一切衆生、いやしくも如来本願大智海より生ぜざるものは、全て二乗雜善中下の屍骸と言われるのである。如来の前には屍骸と同一なるが故である。

「名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば 功德のうしおに一味なり」

声聞、菩薩すでに屍骸である。逆謗の屍骸たることは言うを要しない。一切は悉く屍骸である。罪徳一味無碍なる名号不思議によつて、功德の潮に一味に転成せらるべきである。しかるに、如来を真に信ぜざる凡夫は、屍骸であつて屍骸たるを知らず、名号の智慧光に照破せられて自力死んで屍骸とならず、逆悪のまま生きて通るが故に、誹謗正法の毒刃を揮い、一切の賢聖を眼下に見下し、仏法僧の三宝を毀滅して、怖れざるに至るのである。まことに本願を信じ、光に摂取されて自力に死んで、逆謗の死骸たるを知り、廣大威徳の大信海に生かさるべきである。

和讃にいわく

「本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ」

信巻にいわく、

「遇、淨信を獲ば、是の心顛倒せず、是の心虚偽ならず、是を以て、極悪深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」と。

唯除五逆誹謗正法と抑止せられる世尊の真意知るべきである。一切衆生は、一念眞実の淨信によつて救われるのである。この問題についておわる。